

# オンライン英会話とeポートフォリオを活用した大学英語授業の試み

深田 将揮

畿央大学教育学部現代教育学科 (〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2)

## The implementation of multiple learning media in university English courses

Masaki FUKADA

Department of Education, Faculty of Education, Kio University  
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 635-0832, Japan)

**要約** 畿央大学では、2014年度から1回生を対象とした教養英語授業でWEB上に日々の語学学習の記録を残す、eポートフォリオの取り組みを行っている。学習の振り返りや課外でのさらなる学びに繋がっている。しかし、授業を進めているうちに教室内外で学んだ内容や表現が実際の会話等に活かされるのは限られ、さらに英語学習のモチベーションを高め、英語学習を発展的に進め、さらに英語力を上げる契機になりにくいという課題が見えた。そこで、学んだ知識を実践的に使う機会を与えることで、学ぶ意欲を高め、さらには、英語力をさらに伸長する方法を模索するためオンライン英会話のEZ to Talkを導入した。その結果、事前事後のスピーキングテストにおいて一定の効果が見られ、また、事後のアンケート調査においても肯定的な意見が出た。

Keywords : オンライン英会話、eポートフォリオ、e-Learning、大学教養英語授業、学習コミュニティ

### 1. はじめに

畿央大学では、2014年度から全1回生対象の必修科目授業「英語コミュニケーション」において3つの改善（授業、到達目標、意識）項目を挙げ、具体的な英語教育改革に着手した。授業では、従来のシラバス、教材等を見直し、毎回の授業の到達度をCan-Do Listを元に自己評価させている。このCan-Do Listは、学習の到達度を4つの技能（Reading, Listening, Writing, Speaking）別項目から測るもので、畿央大学英語科が独自に開発した自己評価のための尺度である。例えば1回生前期は、英語で自分を表現して人間関係を築くことができるというような明示的な到達目標を掲げ、授業内の学習とCan-Do Listの目標がリンクするようにし、学生が自身の到達度を自己評価しやすいようにしている。また、毎回の授業終了時に、学生が自分の学習を振り返り、課外での学習や将来的な学習に紐付けがしやすいよう学習支援システムであるWeb-Based Coordinated Education Activation System（以後、CEASと表記）上のKio Language Portfolio（以後、KLPと表記）に記録を作成させている。これは、オ

ンライン上に学習記録を残す、いわばeポートフォリオである。ここには、授業内での課題（できなかった項目）を具体的に記し、その課題を克服するための具体的な学習方法を学生は策定する。学習を授業外へと繋げることを目的にし、専用サイトからいつでも容易に学習の進捗が確認できるシステムである。さらに、授業内の学習事項をさらに深化させるため、また学習の補完的役割としてe-Learning教材（Practical English 7）の受講をさせている。（深田ら、2016）

この取り組みは、2014年度から開始し、2018年度で5年目にあたるがこの学習システムを運用する中で新たな課題が毎年度末に行っている授業担当者ミーティングや学生へのアンケート（CEAS上のKLPに付加した1年間の最終アンケート）から明らかになった。それは、教室内で学んだ英語表現や、語彙等が教室外で活用されることが限定され、結果、英語学習のモチベーションをさらに高め、英語学習を発展的に進め、英語力をさらに上げる契機になりにくいということである。

そこで、学んだ知識を実践的に使う機会を与え、学ぶ意欲を高め、さらには、英語力をさらに伸長する方

法を模索するためオンライン英会話のEZ to Talkの導入を行った。これにより、普段の対面式授業のみならず、複数の学習メディア（オンライン英会話、eポートフォリオ、e-Learning）を課外で活用した学習環境を提供することが可能となった。本研究では、対面式授業内で学んだ知識を実践的に使う機会を課外で与えることで、学ぶ意欲がどう変化し、さらには、英語力がどのように変化するかといった教育的効果を明らかにする。

## 2. 複数の学習メディアを活用した学習環境

今までの授業での学習は、教員からの指導を通して知識（重要表現や語彙、活用方法等）を得て、また教

員や友人との練習を通して、知識を習熟させ、その後、課外で学習の補完としてe-Learning教材であるPractical English 7を活用していた。そしてその学習の振り返り、記録としてeポートフォリオであるKLPに記入をしていた。これにより、授業の学びが課外への学びに、そしてポートフォリオの記録からさらなる学びや気づきを得て、次の授業に繋がるようになっていた。様々なメディアを媒介としながら、学生の英語の学びに一定の効果があったが、この学習環境では、実際の「活用の場」を提供できないため、学習の動機向上や英語学習を発展的に進める契機になりにくいという課題が出た。(図1)

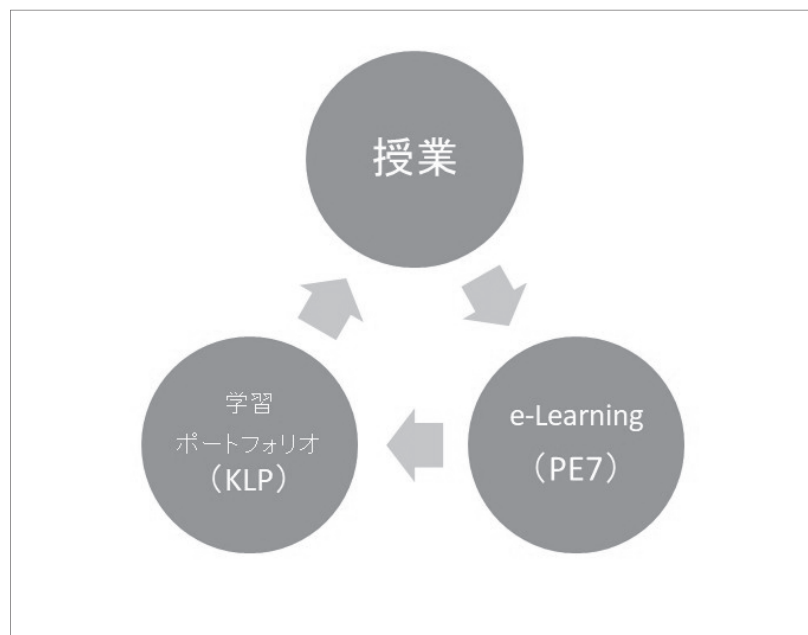


図1. 今までの学習の流れ

おそらく、日本のようなEFL (English as a Foreign Language; 外国語としての英語) 環境下を考えれば、大学での英語授業で活用の場を提供できないのは、ある程度仕方がない。畿央大学でも、ネイティブの講師による授業やイギリス、カナダでの短期語学留学などの学んだ表現を使えるような機会を提供しているが、全員がその機会を得ているわけではない。そこで、学んだ知識を実践的に使う機会を与え、学ぶ意欲を高め、高次的な学びへの接続をより円滑に学習者に提供するためオンライン英会話のEZ to Talkの導入を考えた。このEZ to Talkは、いわゆるオンライン上でスカイプを使って講師と英会話ができるサービスである。他にも同様のサービスはあるが、EZ to Talkの特色は、①自己学習と英会話が連動している点、②オンライン英会話の講師の質が高いことである。(EZ to Talk シ

リーズWEBサイト) 今までのオンライン英会話は、とにかくたくさん話せるというのが特徴で、自由会話が主である。しかしながら、いくらたくさん話しても知識がないままレッスンを受けるだけでは、体系的知識・英語運用能力として最終的に定着することがなく、単なる会話練習で終わってしまう。また精神的にも負担が高く、学習効率が高いとは言い難い。その点、本システムは、畿央大学の学生に対してすでに導入しているe-Learning教材 (Practical English7) と連動しているため、上述の課題を解決でき学習効果が期待できるのではないかと考えた。また、講師は、主にフィリピン在住のネイティブ講師で、日本との時差が少ないためにレッスンの予約がしやすいというのも大きな魅力であった。

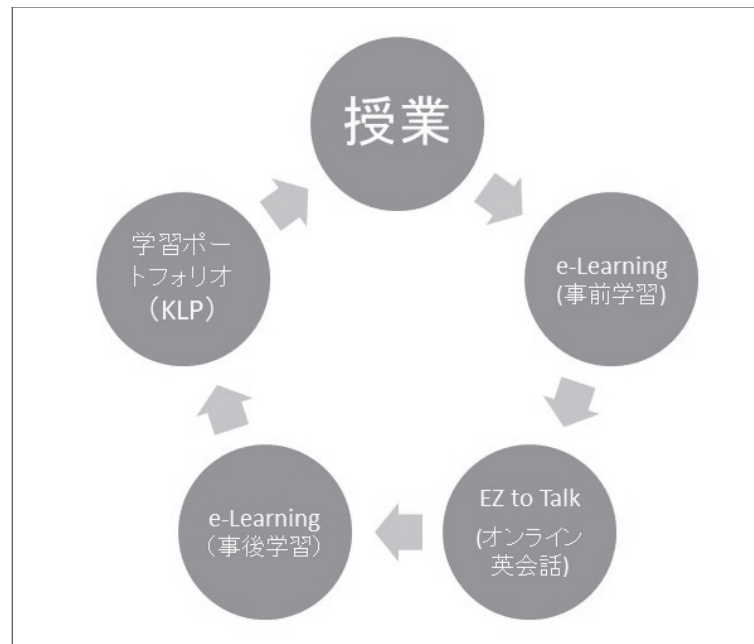


図2.新しい学習の流れ

学生は、まず授業に臨む。授業では、コミュニケーション能力を向上することを目的としたテキスト内容になっているため、コミュニケーションに必要な重要表現や語彙を学習する。その後、課外や授業で学んだ事柄、スキルを基本として、(オンライン英会話に向けた) e-Learningの事前学習を行う。ここでは、基礎となる重要表現を確認し、音声、動画、画像等を駆使した教材で学習内容の定着を図る。その上でオンライン英会話を実施、英会話では、Practical English7で学んだ学習内容を活用し、会話を繰り返すことでさらに習熟度をあげる。オンライン英会話後、講師からのフィードバックを元に、会話内で不十分だった表現、文法事項や語彙などを再度、Practical English7を利用して復習に活かす。最後にポートフォリオに学習の記録を残し、次の学習や授業に繋げるとい学習サイクルが可能になる。(図2) これにより、授業の意義が明確になるのみならず、授業で学んだ表現が実際にどのように使われるかわかることで、さらなる英語学習のための動機付けが高まり、学習内容をより深く学ぶようになることが期待できる。

### 3. 方法

#### 3.1 参加者

参加者は、1年生必修科目である「英語コミュニケーション」の受講生で、授業の延長学習としてオンラインでの英会話学習ができるという形で募集を行い、参加を希望した学生である。募集は、2017年11月下旬頃に全1回生対象にメールでの案内、英語コミュニケーションの授業内でフライヤー配布などを行い、学生へ

の告知を実施した。参加に対して、以下の4点を条件とした。

- 1) 英語コミュニケーション (B または、II ; それぞれ2017年度後期開講科目) の授業を受講していること
- 2) 本取り組みを理解し、熱心に英語学習に取り組む意志があり、全8回のオンライン英会話を期間内に実施、毎回の内容をポートフォリオとしてまとめること
- 3) 事前・事後のスピーキングテスト、中間報告会、最終報告会に参加し、それぞれ課された課題、報告等を行うこと
- 4) 事業成果を報告する際、研究参加に同意すること

上記を条件としたのは、今回の取り組みが後期開講科目の英語コミュニケーションの授業と連動している点、つまり、限られた期間内に様々な学習媒体に触れる必要があったからである。

募集の結果、最終的に20名の参加があった。この20名は、2017年度後期の英語コミュニケーション全受講生 (578名) の3.4%にあたり、男性4名、女性16名で、それぞれの所属学科は、看護医療学科6名、健康栄養学科3名、環境デザイン学科2名、現代教育学科9名であった。(初期の募集では、25名の参加があったが、うち5名が専門科目学習の専念、体調不良等の理由で離脱した。)

### 3.2 手順

まず、参加者には実施説明会（2017年12月15日）を行い、学習の方法や流れなどを説明した。次に参加者の現状の英語スピーキング能力を測定するため学習を開始する前にオンラインスピーキングテストの「VERSANTスピーキングテスト」（点数は、20点から80点の幅で採点され、結果は、総合点、文章構文、語彙、流暢さ、発音の各項目で評価）を受験させた。このテストは、オンライン上でテストを受験、約20分で採点可能なテストである。客観的な基準でスコアを判定、採点にはすぐれた言語認識システムを導入しているため、判定のばらつきが少ないのも特徴である。

学習は、大学での授業の空き時間や自宅などで行わせる自主学習という形態を採り、次の流れで行った。  
①基礎となる重要表現などをPractical English 7のe-Learning教材で学習、②オンライン英会話の教材をダウンロードして、オンラインで話すための予習をする、③講師とオンライン英会話を開始、④学習した内容、振り返り等をポートフォリオに記入、⑤期間内に

8回のオンライン英会話の学習を行い、事後テストとしてVERSANTスピーキングテストを再度受験させ、さらに、学習状況について聞くためアンケート調査を行った。学習期間は、おおよそ2か月間で途中、学習の状況を確認するため中間報告会（2018年1月15日）を実施し、学習上の課題、成果等を共有、また、学生サポーター（上回生の英語熟達者）による学習を支援する取り組みも行い、最終的に学習の総括を行うため最終報告会（2018年2月28日）も行った。

### 4. 結果

VERSANTスピーキングテストを事前、事後で分析した結果、総合点で統計的に有意な差が見られ ( $t = 3.07, df = 19, p = .006$ )、効果量においても中程度の効果 ( $d = .50$ ) があった。また、文章構文においても統計的に有意な差が見られ ( $t = 3.93, df = 19, p = .001$ )、効果量においても中程度の効果 ( $d = .50$ ) があった。(表1)

表1. VERSANTスピーキングテストの結果 (n=20)

	<i>Pre-test</i>		<i>Post-test</i>		<i>t</i> 値	効果量 <i>d</i>
	Mean	SD	Mean	SD		
総合点	31.05	4.12	33.30	5.14	3.07**	0.50
文章構文	34.35	7.10	38.00	7.80	3.93**	0.50
語彙	32.00	7.32	34.90	8.18	1.56	0.38
流暢さ	27.30	5.13	29.20	5.60	2.15*	0.36
発音	30.65	2.03	31.00	3.18	0.64	0.13

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

また、毎回の学習の記録を残したポートフォリオからは、初期の段階での不安や自分の英語力の欠如が見られたが、回を重ねるごとに学習が質的に変化していることも読み取れた。(表2)

さらに、参加者に事後行ったアンケート調査 (CEAS上のアンケート機能を使って作成し、実施) では、今回の学習について、また、今後の学習の継続等について5段階のリッカート尺度で質問した。結果、今回の学習を通してさらに学びを深め、継続したいという気持ち (今後、もっと英語を勉強したいと思いますか。; 4.75ポイント) が見られた。(表3)

また、記述結果 (今回の学びを振り返った自由記述式の項目) を分析したところ、学んだ知識を使うということの重要性、新たな気づきがあったこと、また、英語学習に対する動機の変化が見られた。(表4)

表2. ポートフォリオの記述内容（抜粋、原文ママ）

参加者	内容
Aさん	<u>Skype つながるまではドキドキ</u> でしたが、繋がってからは <u>楽しく話せてよかったです</u> 。今後のレッスンも <u>楽しく、行っていきたい</u> です。
Bさん	<u>緊張と不安でなかなかうまく話せな</u> かったです。また、リスニングが苦手なため、先生の言うことが聞き取れなかつたりして、 <u>何度も聞き返してしまい、もっと英語に慣れる必要がある</u> など感じました。
Cさん	自分ならもっと、上達するよ。と言われたので、 <u>今後もっと頑張りたい</u> なと思いました。
Dさん	もっと勉強すれば良くなるよ、諦めないでと励ましてもくれ、 <u>あまり上手く出来ずに落ち込んでいたので元気が出</u> ましたし、 <u>英会話頑張りたい</u> と思えました。
Eさん	<u>1回目よりは受け答えができた</u> が、 <u>まだまだぎこちなくな</u> ってしまう。よりスムーズにやり取りができるようにしていきたく感じた。単語力ももう少しつけたい。
Fさん	英語が話せるようになりたいと、参加を決意しましたが、 <u>英語が苦手な人にとって英会話は、レベルの高すぎる</u> ことだったと痛感しました。思っていることがあるのに、うまく言葉が出てこず、先生にも伝わらないので、 <u>たくさんもどかしい</u> 思いをし、 <u>もっと自分は英語を学ばない</u> といけないと改めて感じました。
Gさん	実際に英会話をしてみると <u>緊張してしまい、なかなか言葉が出てこ</u> なかつたり会話がとまったりしてしまいましたが、 <u>少しでも会話ができたときは嬉</u> しかったです。
Hさん	先生が話していることが <u>最初に比べて聞き取れる</u> ようになってきたと感じました。

表3. 事後アンケートの結果（抜粋）

	今後、留学や海外インターンシップに参加してみたいと思いますか。	今後、英語検定やTOEIC等の検定試験にチャレンジしてみたいと思いますか。	今後、もっと英語を勉強したいと思いますか。	自分でオンライン英会話を継続したいと思いますか。	総合的にみてこの取り組みは自分に効果があったと思いますか。
<i>n</i>	20	20	20	20	20
<i>M</i>	4.4	4.4	4.75	3.65	4.25
<i>SD</i>	0.75	0.68	0.55	0.81	0.72

表4. 事後アンケートの記述結果（抜粋、原文ママ）

参加者	内容
Aさん	<u>書き言葉と話し言葉の違いを改めて感じた</u>
Bさん	<u>毎回反省点があり、終わった後は、英語学習に対するモチベーションが上がって、本棚に眠っていた英語のテキストを取り出した</u>
Cさん	<u>間違ってもいいから伝える努力をすることが大切と気づいた</u>
Dさん	<u>自分の英語でどの程度伝えることができるかを知るよい機会になった</u>
Eさん	<u>初回と最後の学習では、聞き取る力が違った</u>
Fさん	<u>自分の考えがうまく伝わらず、これからもっと英語の勉強を頑張らないといけないというモチベーションになった</u>
Gさん	<u>英語を継続的に学ぶ大切さを学びました</u>
Hさん	<u>講師は、自分の事、自分の街の事を言えるのに、私は言えなかった。もっと気にしながら生活をしたい</u>
Iさん	<u>伝わることの喜びを知り、自分が発言しないと何も始まらないことがわかった</u>

## 5. 考察

これらの結果から二つの点を考察したい。まず、事前事後のスピーキングテストについて述べる。スピーキングテストから特に「文章構文」において統計的に有意な結果になった。これは、ポートフォリオの記述からもわかるが、学生自身の伝えようという気持ちが文章の構造に影響したことによると考えられる。人は、何かを伝えようとする時、その表現内容や伝え方を考える。おそらく、母語である日本語を使って会話する時と比べ、外国語である英語を使った場合、語彙力、文法力等様々な能力が母語よりは劣っているため、意識的に言語を運用する必要があり、母語を使う場合よりも負荷が大きくなる。そのような中で学生は、オンラインでの英会話を通して自身の考えや気持ちを伝えるために意識的に文章の構成を考えたと考えられる。言葉を巧みにまた、豊かにさせていくこのような過程は、言語を実践的に活用するという意味では非常に有意義で、教室内の練習だけでは、なかなか得られるものではない。その意味でもこの文章構文において一定の効果が出たことは、本取り組みの成果とも言えるだろう。

もう一つの点は、学生の学習に対する動機に影響したことである。つまり、伝える喜び、伝わった喜びがもっと伝えたい、また、もっと学びたいという気持ちに繋がったことである。事後アンケートの記述結果にもあるように自分の考えをうまく伝えられないもどかしさや会話に対する反省等がありながらも、伝わるこ

との喜びを感じることで次の学びや気づきのきっかけになっている。会話を成功するためには、即座の反応が求められる。ゆえにその中で自分が英語で苦勞して表現した内容が伝わり、会話が連続的かつ豊かになっていったことでさらに伝えたいという気持ちやより深く伝えたいという欲求が生まれ、最終的にさらなる学習意欲を喚起する結果になったのではないだろうか。

このことから今回の取り組みは、学んだ知識を実践的に使う機会を与えることで、英語を学ぶ意欲を高め、さらに学習したいという考えを得る契機になったと言えるのではないだろうか。

## 6. 結語

本取り組みを通して言語を効果的に学習するには、実践的な活用やそれを通して得られる気づきが重要であるということが言えるのではないだろうか。ただ、今回の取り組みでは、20名の参加者がいたもののポートフォリオの記述は8回分と限られたものであった。日々の学習の記録、また学習の成果や気づきを分析するという意味では、分量が少なく、より詳細な分析ができなかった。そこで、現在、新たな取り組みとして3か月間のオンライン英会話を通して、スピーキング能力がどのように向上するかを検証している。この取り組みでは、本取り組み同様に事前のe-Learningの活用、オンライン英会話を通して学び、教員からのフィードバックを得て、ポートフォリオに学習記録を残すという学習サイクルを形成している。ポートフォリオという形で学習が可視化されたものを質的に研究

することで、効果的な学習方略の提示、さらには指導者である教員にとっても指導のヒントを得ることも期待できる。現在取り組んでいるオンライン英会話の取り組みに関しては、近日中に報告したい。

### 謝辞

本取り組みは、畿央大学2017年度教育改革事業の助成を受けたものです。この場を借り関係の皆様に御礼申し上げます。

### 参考文献・サイト

Buzzetto-More, N. (2010) . Assessing the efficacy

and effectiveness of an e-portfolio used for summative assessment. *International Journal of E-Learning and Learning Objects*. 6 (1) , 45-62.

EZ to Talk シリーズ. Retrieved from [https://www.reallyenglish.co.jp/education\\_course/ez-to-talk/](https://www.reallyenglish.co.jp/education_course/ez-to-talk/) on Mar 27th,2019.

深田将揮・竹下幸男・Randy Muth (2016) .「畿央大学におけるCEASを活用したLanguage Portfolio システムと英語授業改善」『畿央大学紀要』13, 27-35.

Versant. Retrieved from <https://www.versant.jp/> on Mar 27th,2019.

